北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

Title	教科書掲載短歌の考察その１　－平成27年度中学校国語教科書を中心に－
Author(s)	大村，勅夫
Citation	国語論集，19：277-297
Issue Date	2022-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/12169
Rights	

Hokkaido University of Education

教科書掲載短歌の考察　その1

―平成27年度中学校国語教科書を中心に―

大村勅夫

1　問題の所在

教科国語は過渡期にある。例えば、学習指導要領が改訂され、中でも高校国語に関しては、必履修科目が変更という大きなものだった。例えば、大学入学センター試験（以下、センター試験と略す）が大学入学共通テスト（以下、共通テストと略す）に変わったことに伴い、問題作成の方針が変更された。例えば、日本文藝家協会や日本文学協会なども、それまで積極的に国語教育・文学教育を述べてこなかったものが、声高に発言を繰り返した。これらには、必ずしも連関があるとは言えない。ただし、そのいずれもが、異口同音に国語教育や文学教育の指導を行う国語教師などに対し、変化を迫っているのは間違いない。国語教師のみならず、他教科教師・学校全体・保護者・児童・生徒・世間全体が教科国語に注目している・注目せざるを得なくなっている状況にあるといえるだろう。本稿は、教科国語の変化に注目するものである。中でも、文学教育を中心として注目するものである。

先にあげたように、高校国語には大きな変更があった。必履修科目が変更され、かつ、指導内容の配分も変わった。いわゆる「読むこと」の指導が減り、「話す・聞くこと」「書くこと」の充実が企図されたものへと変更になった。稿者は、その変更について、疑義を唱えているわけではない。その意図やねらいについては稿者なりの理解を持っている。ただし、指導内容の配分変更に対し、学校現場の国語教師は大きく対処する必要があり、そこに懸念を持っている。その懸念とは、文学教材の指導についてである。なお、本稿において、文学とは近代以降の文学的な文章とする。

高校国語の必履修科目は変わった。ただし、選択科目も大きく変更されている。「現代文B」（4単位）が、その類似の内容として「論理国語」「文学国語」（各4単位）へとなった。単位数だけをいえば、4単位で標準単位数実施されていた内容が8単位へと拡充されたわけである。教科国語のみを視野としたならば、4単位に4単位を加える状況となり、より時間をかけて指導することができ、より素晴らしい授業が期待されると考えることもできよう。しかし、この単位数に関しては、教科国語のみで考えることは当然できない。全教科・

学校全体で考えなければならないものである。新学習指導要領において、必履修科目の発展科目としての選択科目のうち、標準単位数が減じられたものは、地理歴史の一部と数学の一部だけである。しかも、いずれも1～2単位の減である。先にあげたように、1つの教科で4単位を増やすためには、複数の教科で単位数を減じ、かつ、多くの場合は、カリキュラムにおける全体の単位数を1つ以上増加しなければならない。ごく単純なパターンを想起するならば、例えば、5日間6時間授業であったものを、うち1日を7時間授業にする必要が出てくるということになる。これは、教科国語が学校全体・生徒全体にとって極めて重要であることの示唆といえなくもない。ただし、それを理解・確認してもらうには、告示されてから1～2年間という短期間では困難であるだろう。現実的な選択として、「論理国語」ないし「文学国語」のいずれか1つ、とせざるを得ない。実際、稿者が昨年度、高校に向けてアンケートしたところ、40校余りの回答のうち、「論理国語」「文学国語」の両方を選択するという学校は無かった。かつ、その回答において、「文学国語」を選択科目としてカリキュラムに配置するという高校はおよそ60％しかなかった。つまり、9割以上の高校が配置していた「現代文B」において文学教材を扱った授業を受けていた高校生であったが、新学習指導要領下では、国語授業で文学に触れる者がその2／3となってしまう。高校国語において文学の授業をいかにしたらよいか。きわめて大きな課題が噴出したといえよう。

この課題は、何も高校国語だけのものではない。というよりも、高校国語がそのような、文学にむつかしい状況になるからこそ、小中国語における文学指導の充実がより一層求められなければならない。そして、その充実のためにも、小中高国語およびその教科書における文学指導の系統性を考える必要がある。本稿では、その一視点として、短歌教材に注目する。なお、本稿においては、短歌とは近代以降の短歌とする。文学的な文章を思い浮かべたとき、やはり小説や物語が真っ先に来るだろう。ただし、小中高における小説を思ったとき、その文量・内容・方法はどうだろう。いわゆる定番教材を考えても、小学校の「ごんぎつね」、中学校の「故郷」、高校の「羅生門」を並べてみると、その様々についての難易度はきわめて上がってきていると考えられよう。言葉を換えるならば、難易度の上がり方が急であるといえよう。その視点で考えた際、短歌はどうだろうか。例えば、与謝野晶子・石川啄木・正岡子規などの短歌は、どの校種にも掲載されている。もちろん、歌によっての難易度もあるかもしれないが、それらは三十一文字という限定の中で表現されるという同一性を持つ。また、同じ歌人による作品について校種を変えても学ぶことによる系統性を持つ。さらには、各歌が何らかの感動を詠み上げたものであるという共通性を持つ。つまり、一定の枠の中で、積み重ねをしっかりと踏まえて指導することのできる充実さと系統性を持った文学教材として短歌は考えられるのである。小中高の短歌の指導を考えることは教科国語の充実において価値ある

ことと考える。本稿は、その端緒として、中学校教科書掲載短歌について考察するものである。

2　研究の方法

本稿では、平成29年告示学習指導要領の直前のもの、すなわち、平成20年告示学習指導要領における最後の検定教科書である平成27年度中学校国語教科書の掲載短歌について一覧化し、分析・考察をする。これは、本稿以降の研究において、令和3年度教科書との比較・分析や他校種教科書との比較・分析・考察を企図しており、そのため、本稿はその基礎研究かつ史的研究の位置づけであることによる。このことの先行研究として、入江昌明（二〇一〇・二〇一一・二〇一三）がある。(注1)これらは平成期の中学校国語教科書における掲載短歌を調査したものである。ただし、近代以降の短歌だけでなく、それ以前のものについても載せている。本稿は入江によるこれらの論考を発展させたものでもある。また、その短歌の章立てにおける章末の設問、いわゆる「学習の手引き」についても一覧化し、考察する。これもまた、令和3年度のものと比較するためであるが、同時に、短歌を教材とした章立てが何をねらいとしたものとして設定されているかをとらえるためである。

3　平成27年度中学校国語教科書

ここでは、出版会社ごとに、平成27年度中学校国語教科書掲載短歌および章末問題について調査し、それぞれに考察を加える。なお、掲載歌の記載の仕方として、章タイトル・作者名・掲載歌の順とする。また、掲載歌の文言表記については、教科書に記載されたままに記述する。

(1)東京書籍

『新編新しい国語2』

「扉の短歌七首」

岡本かの子

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命をかけてわが眺めたり

北原白秋

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり

荻原裕幸

夏木立ひかりちらしてかがやける青葉の中にわが青葉あり

早坂類

虹よ立て夏の終りをも生きてゆくぼくのいのちの頭上はるかに

穂村弘

ほんとうにおれのもんかよ冷蔵庫の卵置き場に落ちる涙は

千葉聡

卒業生最後の一人が門を出て二歩バックしてまた出ていった

読む〈言語感覚〉

「短歌を楽しむ」道浦母都子

与謝野晶子

金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に

寺山修司

海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり

栗木京子

観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生

「短歌五首」

正岡子規

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

斎藤茂吉

最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片

若山牧水

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

石川啄木

不来方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心

俳万智

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

てびき

短歌を読み味わい、鑑賞したことをまとめてみよう

［目標］

・情景や心情を表す語句に注意して、短歌を読み味わう。

・短歌の表現の工夫などを捉えて、鑑賞したことをまとめる。

読み取る

1 「短歌を楽しむ」で取り上げられている三首について、鑑賞文を参考にして情景や心情を捉えよう。また、音読して短歌のリズムを味わおう。

2 「短歌五首」を読み、それぞれの歌に詠まれている情景や心情を想像したり、気に入った歌を暗唱したりしてみよう。

考えを深める

3 「短歌五首」（あるいは、「扉の短歌七首」を加えた十二首）から一首を選び、鑑賞したことをまとめよう。

たすけ 短歌から読み取ったことや想像したこと、表現の工夫として感じられたことなどを挙げよう。鑑賞したことを発表し合うのもよい。

言葉の力 短歌を鑑賞する

・短歌の形式を理解する。短歌は、五・七・五・七・七の三十一音を定形とする。

・音読して、短歌のリズムを感じ取る。

・句切れに注意して、音読や意味の理解に役立てる。

・語句の意味や表現技法などに注意して、情景や心情を捉え

る。

・読み取ったことから、想像を広げていく。

書く〈詩歌創作〉

「短歌のリズムで表現しよう」

［目標］

・自然や体験の描き方を工夫して、短歌を作る。

短歌は、五・七・五・七・七のリズムを持った定型詩である。自然の風景や体験したことなどを題材にして、一瞬感じた心の動きや、じっくり深めた自分の思いを、短歌のリズムに乗せて表現してみよう。

1　短歌の題材を見つける

2　短歌のリズムに合わせ、描き方を工夫する

言葉の力　描き方を工夫する

・鮮明な印象を与えるように言葉を選ぶ。

・読者が想像を広げたくなるように書く。

3　清書して読み合う

書く〈感性・創造〉

「いきいきと描き出そう　短歌から始まる物語」

［目標］

・情景や心情などをいきいきと表すように、描写を工夫して物語を作る。

・書いた物語を読み合って、材料の活用の仕方などについて意見を交換し、自分の考えを広げる。

想像を豊かに広げて、物語を作ってみよう。それには、想像を広げるための出発点が必要になる。例えば、読んで心に残った短歌を出発点にしてみよう。短歌では、情景や心情が、限られた言葉に凝縮して表されている。一方、物語では、場面ごとの情景や出来事、人物の行動や心情などが多くの言葉によって描き出される。短歌の表現から想像を膨らませ、自分だけの物語を創作しよう。

1　短歌を選び、想像を膨らませる

短歌

1　お互いに声掛け合って頂の白い雲まで登ってゆこう

2　そして今審判の吹くホイッスル最後のシュート空へ外れる

3　「ごめんね」とその一言が言えなくて帰り支度の君を見送る

4　雪積もる朝は何だかうれしくて一番乗りで歩く校庭

5　踊り場で擦れ違うとき先輩のかばんの中で筆箱が鳴る

6　弟が腹ばいになり描き散らす赤のクレヨン青のクレヨン

7　押し入れは青き水槽遠い日の人形・絵本・積み木など住む

8　宿題を始める前のファンタジーこしばらくは稲妻の巻

9　図書室は森の静けさ窓際の席にうつむく友を見つけた

東京書籍は短歌を2年生に配置している。なお、短歌の章立ては各社とも2年生に配置している。創作する章を配置し、「書く（詩歌創作）」と記載しており1年生で詩・3年生で俳句と、詩歌についての創作学習を3年間で分割して行うことを意識していることがわかる。各社も詩・短歌・俳句の学習を1～3年に分割で配置しているが、3年間の大きな「詩歌単元」として単純に見とらえることができるつくりとなっているのは東京書籍だけである。

また、短歌を学習材とし、「読む〈言語感覚〉」「書く〈詩歌創作〉」「書く〈感性・創造〉」と三つの学習を提起している。特に、「書く」については、単に短歌創作だけでなく、短歌をもととした発展的創作の学習をさせることを企図している。「短歌を出発点に」「短歌の表現から」、「物語を創作」させるものである。

短歌のみが掲載されている章だけでなく、「扉の短歌」と題されて、六首の短歌が掲載されてもいる。加えて、章末の「てびき」にも、歌人のものではないが、九首が載せられている。章における短歌と併せて二三首が掲載されている。

先にもあげた「書く〈感性・創造〉」の学習を詳述する。短歌をもとに創作させる学習である。すなわち、短歌を解釈し、それを踏まえて散文・物語を書き表す学習である。読む→書く（短歌）→読む＋書く（物語）というように、短歌学習を段階的に発展させることを企図している。短歌そのものを学ぶだけでなく、短歌から読み取られたものを文字化し、かつ、自身のものへと昇華させようという学習である。

歌人としては、岡本かの子・荻原裕幸、早坂類・千葉聡は、東京書籍のみが扱っている。ただし、穂村弘「ほんとうに～」・与謝野晶子「金色の～」・斎藤茂吉「最上川～」の各歌については、他社教科書では扱っておらず、東京書籍のみの掲載である。

以上のことから、東京書籍は、学習材としての短歌に可能性をとらえていると考える。すなわち、短歌を、解釈するだけのものでなく、表現するだけのものでなく、そのいずれもであり、かつ、融合できる学習材ととらえているのだろう。この充実の度合いは、他社を圧倒している。掲載歌数も五社のうち最も多く、歌人の作品、歌人ではない者の作品、明治大正期の作品、昭和平成期の作品、と種類にも富んでいる。岡本・荻原・早坂・千葉の作品を載せているのも東京書籍のみである。岡本などは、歌人でありセンター試験にも出題された小説家でもある。掲載歌は、季節に注目させたいもの、中学生の心情に寄り添えるもの、その歌人の代表作のひとつと言われるもの、など多彩である。「扉の短歌」には、それぞれをイメージさせる写真も添えられている。見ることによっての短歌への接近を図ろうとしているのだろう。道浦母都子による書き下ろし「短歌を楽しむ」も、短歌を評する格好の例文であり、同時に、短歌に対する着目点の視座をもたらすものである。単に短歌が並べられ、それを自由

に楽しむのも、短歌への方策ではあろうが、学習者にとって自由度が高すぎるきらいもある。書き下ろしということで、読み手である中学生をしっかり念頭に置いた文章でもある。この「短歌を楽しむ」の価値は中学校での短歌学習において非常に大きい。

(2)学校図書
『中学校国語2』
2生命
言葉を吟味して生きることについての認識を深めよう。

「短歌」
俵万智
「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

「短歌十五首」
心と自然
正岡子規
くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる
道浦母都子
秋草の直立つ中にひとり立ち悲しすぎれば笑いたくなる
河野裕子
振りむけばなくなりさうな追憶の　ゆふやみに咲くいちめんの菜の花
馬場あき子
あやまたず来る冬のこと黄や赤の落葉はほほとほほゑみて散る
青春と歌
石川啄木
不来方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心
平井弘
困らせる側に目立たずいることを好みき誰の味方でもなく
栗木京子
観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生
寺山修司
わがシャツを干さん高さの向日葵は明日ひらくべし明日を信ぜん
歴史と社会の中で
釈迢空
たゝかひに果てにし子ゆゑ、身に沁みて　ことしの桜　あはれ散りゆく
土岐善麿
遺棄死体数百といひ数千といふいのちをふたつもちしものなし
岡野弘彦
砂あらし　地を削りてすさぶ野に　爆死せし子を抱きて立つ母
家族と命

斎藤茂吉

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる

岡井隆

眠られぬ母のためわが誦む童話母の寝入りし後王子死す

植田多喜子

顔よせてめぐしき額撫でにけりこの世の名前今つきし児を

佐佐木幸綱

のぼり坂のペダル踏みつつ子は叫ぶ「まっすぐ？」、そうだ、どんどんのぼれ

学びの窓

1　次の点で短歌に込められた思いや情景を捉え、交流しよう。

1　「心と自然」のそれぞれの歌には、どのような情景と心情が表現されているか。

2　「青春と歌」のそれぞれの歌には、どのような青春の心が表現されているか。

3　「歴史と社会の中で」のそれぞれの歌には、どのような歴史的・社会的状況と心情との関わりが表現されているか。

4　「家族と命」のそれぞれの歌には、家族と命に対するどのような思いが表現されているか。

2　次の手順で短歌表現の工夫を捉え、交流しよう。

1　自分が最も感動した作品はどれか。

2　その作品のどの言葉に心を動かされたか。

3　その言葉にはどのような工夫がなされているか。

4　どのように音読すれば、感動や言葉の工夫を表すことができるか。

3　次の斎藤茂吉の連作「死にたまふ母」を読んで、「死に近き」の歌がどのような経過や心情の変化の中で歌われているか、考えてみよう。

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる

朝さむみ桑の木の葉に霜ふりて母にちかづく汽車走るなり

寄り添へる吾を目守りて言ひたまふ何かいひたまふわれは子なれば

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母は燃えゆきにけり

ついた力を確かめよう〈短歌〉

言葉の力　短歌表現の工夫を捉え、音読に生かすことがで

きた。

考える力　短歌に込められた思いや情景について考えることができた。

知識や技能　連作短歌について知り、そのよさを捉えることができた。

学校図書は、短歌を読むことの学習材として企図している。「学びの窓」には、大きく三つの設問があるが、それぞれ「込められた思いや情景を捉え」「短歌表現の工夫を捉え」「どのような経過や心情の変化の中で歌われているか、考え」とある。いずれも、短歌解釈やそのための着目点に関するものである。この章の最後には、振り返りのためのものとして、「ついた力を確かめよう」とある。そこからも同様のことがとらえられる。

大きな特徴として、斎藤茂吉の連作があげられてものがある。短歌を一首のみでの作品とする視点だけでなく、連続性のある作品としてとらえているのである。「死に近き母～」を、単体として解釈させるのではなく、前後の六首と併せて読ませるのである。これは他社には一切ない。

「短歌十五首」を、ただ並べるのではなく、「心と自然」「青春と歌」「歴史と社会の中で」「家族と命」と類して掲載している。叙景・叙情・叙事といった観点も感じられる。詩歌の分類の一視点を載せているのである。特に、「歴史と社会の中で」と題されて掲載されている歌が扱っている内容は、他社にないものである。

他社には掲載されていない歌人の歌が多いのも特徴である。掲載歌は十五人二一首だが、そのうち、道浦・河野・平井・土岐・岡野・岡井・植田・佐々木の八人である。明治大正期の歌人も昭和平成期の歌人も載せており、バランスがある。また、寺山「わがシャツを～」・釈「たゝかひに～」・斎藤の連作（「みちのくの～」以外）は、他社では掲載されていない歌である。

以上のことから、学校図書教科書の掲載短歌は、歌の内容に注目し、その解釈に向けた授業を企図していることがわかる。解釈への視座として短歌内容を分類しているのだろう。また、斎藤茂吉の連作を用いた学習は非常に特徴的だ。連作を掲載しているものは、同時期の他校種教科書にもない。なるほど、学習者が目にする短歌は、その一首のみでの掲載によるものが多いかもしれない。例えば、新聞の投稿短歌欄であったり、引用された短歌であったり、教科書掲載短歌であったりなどが考えられるが、それらのほとんどは一首掲載である。ただし、短歌雑誌などには連作として掲載されるものも多い。その相違は、授業以降の学習者の意識ばかりでなく、作品の形態の可能性の認識へもつながるだろう。

ところで、学校図書は短歌単元を「2　生命」という大きな章の中に配置している。そこには「言葉を吟味して生きることについての意識を深めよう」とある。言葉は人の営みの表出であり、営みそのものである。「生きる」ことのまさに実感としての短歌というとらえ方

をしていると考える。すなわち、短歌の学習とは生きる実学なのである。

(3)三省堂
『現代の国語2』
2 ことばを磨く
「短歌の世界」俳万智
俳万智
「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ
栗木京子
観覧車回れ回れよ想ひ出は君には一日我には一生
「短歌十首」
正岡子規
くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる
与謝野晶子
その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな
斎藤茂吉
みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる
北原白秋
草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり
若山牧水
白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ
石川啄木
不来方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心
釈迢空
葛の花　踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり
寺山修司
列車にて遠くを見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし
穂村弘
シャボンまみれの猫が逃げだす午下がり永遠なんてどこにも無いさ
永田紅
細胞のなかに奇妙な構造のあらわれにけり夜の顕微鏡

学びの道しるべ
目標
・短歌のリズムや表現方法などの特徴を理解して、作品の内容を捉える。
・情景や心情を表す語句に注意して、短歌の世界を読み味わう。

声に出して読もう

1「短歌の世界」を読み、短歌の特徴を書き出したあと、それぞれの情景を想像しながら、二首の短歌を音読しよう。

考えを深めよう

1「短歌十首」の中から、印象に残った短歌をいくつか選び、どのような情景や心情が詠まれているかをまとめて、印象に残った理由を考えよう。

2 1で選んだ短歌について、作者の表現の工夫を探して、その効果や短歌の魅力について自分の考えをまとめよう。

学びをひろげよう

「短歌の合評会」を開こう

[進め方]

1 選んできた短歌を短冊に書く。(名前は書かない。)

2 集めた短冊から一枚ずつ順番に、司会が短歌を読みあげる。

3 その短歌のよさや自分の受け止め方、表現の工夫としてよかったところなどを発表し合う。

4 作者と選んだ人を公開し、その短歌を選んだ意図を発表してもらう。

「創作文 読みたくなるしくみを工夫する」わ

作品例

詩 思い出観覧車「観覧車〜〜」をもとに

一日の終わりを惜しみ
回るよ回る観覧車
人もまばらな広場には
夕日に照らされ たたずむ二人
長くのびた影のような
はかなき願い
胸に抱いて

三省堂は、解釈→創作へと学習が進む章立てになっている。編集委員である俵万智による書き下ろし「短歌の世界」から始まり、その次に十首の短歌を掲載し、「学びの道しるべ」と題される章末問題で解釈や感想を書かせる。そして、「「短歌の合評会」を開こう」と言語活動案を提起し、短歌等を素とした創作文学習へと発展させている。その具体例として、当初の俵万智による書き下ろしで評を加えていた栗木京子の短歌を用いて詩へと書き換えている。

特徴的なものが2つある。1つが、「短歌の合評会」である。合評会をしよう、と提示するだけでなく、その具体的進行方法までを書いている。もう1つが、「創作文」である。ここでは、1・2年生のここまで扱った文学的な文章を素材として、それらを「続編(後日譚)」「前編(前日譚)」「番外編(外伝・裏話)」「手紙」「詩／短歌」「シナリオ

（演劇・ドラマ・映画）」「パロディー」という他のジャンルへと書き換えるものである。

掲載されている短歌が十二首と少ないため、歌人も同じく十二人があげられるだけである。そのうち、他社には掲載されていない歌人は永田紅だけである。ただし、与謝野「その二十～」・釈「葛の花～」・寺山「列車にて～」・穂村「シャボンまみれの～」については、他社教科書では扱っておらず、三省堂のみの掲載である。

以上が、三省堂教科書における短歌単元の特徴等である。掲載短歌数は少ないものの、非常に意欲的なつくりとなっている。俵万智の書き下ろしにより、短歌の評や解説を見せることができている。これにより、誰かが詠んだ歌を解釈することと自身が作成した短歌そのものを深く読むことの例示となっている。これがその後の合評会の活動と連動する。どのような視点で短歌を解釈するか、さらには、その学びを活かして短歌を詠むか。短歌についての深まりが得られるようにつくられていることがわかる。ただし、作歌については明確に述べられておらず、書き換えの素材としての提示の側面が大きいことは不足なところかもしれない。創作文作成という書き換え学習はもちろん短歌を素材とするだけのものではないが、短歌を始めとした文学というものの学習材としての可能性が大いにあることが感じられる学習といえるだろう。掲載歌人は、明治大正期の歌人の割合がやや高い。これは、俵万智の文章が俵・栗木と現代歌人のものみを扱っているのに比して、違和感がある。「学びの道しるべ」に「『短歌十首』の中から、（中略）どのような情景や心情が詠まれているかをまとめて」とあるが、明治・大正期の短歌は、学習者にとって情景や心情が読み取りやすいものかどうかに疑問がある。あるいは、それぞれの歌は、時代に関わらず通ずる心情が歌われているという考えであろうか。反対に、最近のものである穂村・永田の掲載されている短歌は、その解釈をすることに非常なむつかしさがある歌ではないだろうか。

（4）教育出版

『伝え合う言葉中学国語2』

四表現を見つめる

文字や音声の表現一つ一つに丁寧に向き合うと、そこからさまざまな思考や想像が生まれてくる。

「近代の短歌」

目標

・情景や心情を掘り起こし、声に出して短歌を読む。

ふるさとの歌

石川啄木

やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく

北原白秋

帰らなむ筑紫母国早や待つと今呼ぶ声の雲にこだます

母の歌

斎藤茂吉

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

旅の歌

若山牧水

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

恋の歌

与謝野晶子

なにとなく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな

小百合さく小草がなかに君まてば野末にほひて虹あらはれぬ

みちしるべ

1 『近代の短歌』の中で紹介されている歌の中から、最も印象に残ったものを選ぼう。

2 具体的な情景や行動を描く表現を抜き出し、それが作者のどのような思いや感動と結びついているか、考えよう。

3 「ふるさとの歌」「母の歌」「旅の歌」「恋の歌」の中から好きな歌を選んで、声に出して読み、五・七・五・七・七という定型の短歌のリズムを体験しよう。

4 「ふるさと」「母」「旅」「恋」の四つのテーマを手がかりに、作者の心情を想像しながら、それぞれの短歌を読もう。

短歌を作ってみよう

1 短歌の創作手順

1 学校や家、通学路などで感じた「感動や気づき」を探してみる。

2 探し出した「感動や気づき」を一、二文で書き表してみる。

3 感動や気づきを表す「うれしい」や「きれい」などの言葉をそのまま使わず、表現を工夫する。

4 少し誇張した表現や、想像したできごとを混ぜてみてもよい。

2 作った短歌を読み合ってみよう

1 友達と作品を交換して、声に出して読み合う。

2 友達の短歌を読むときは、描かれている情景やできごとをできるだけ具体的に思い浮かべてみる。

3 短歌として特徴のある表現を認め合い、簡単な鑑賞文を書いて交換する。

初句切れ

吉井勇
夏は来ぬ相模の海の南風にわが瞳燃ゆわがこころ燃ゆ
二句切れ
若山牧水
白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まず
三句切れ
北原白秋
この山はたださうさうと音すなり松に松の風椎に椎の風
四句切れ
木下利玄
街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る
句切れなし
佐佐木信綱
ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

教育出版は、「表現を見つめる」という大きな章立ての中に短歌の章が配置されている。ただし、見つめる＝解釈というだけではなく、「短歌を作ってみよう」という言語活動も提示しており、解釈→表現へとステップをつくっている。

「短歌を作ってみよう」では、創作手順が載せられている。作歌そのものがあげられているものは他社にもあるが、その手順までが書かれたところはない。三省堂の特徴である。また、創作したものを「読み合ってみよう」という言語活動も提示されている。なお、鑑賞文の作成までが示されているが、「鑑賞文を書いて」とあるのみで、鑑賞文を書くためのヒントや手がかりなどはない。

章の名称としては「近代の短歌」である。近代にしぼっているため、佐佐木信綱までの歌人のみで構成された掲載である。「近代の短歌」の中には、「ふるさとの歌」石川・北原、「母の歌」斎藤、「旅の歌」若山、「恋の歌」与謝野、と分類された歌が併せて九首が配置され、かつ、一歌人で複数の歌が連続で配置されているものもある。これは、他社にはない掲載の仕方である。

「近代の短歌」の九首とは別に、句切れについての説明があり、そこにも各句切れの具体例として計五首が載る。句切れについて述べているのも、教育出版のみである。

この教科書は、比較的、独自掲載の短歌・歌人の割合が高い。吉井・佐佐木は教育出版のみの掲載である。石川「やはらかに～」「ふるさとの～」・北原「帰らなむ～」「この山は～」・与謝野「小百合さく～」・木下「街をゆき～」の各歌もそうである。

以上のことから、教育出版教科書は、独自の観点を持っていると考える。まず、近代歌人の作品のみの掲載というところである。他社と異なり、存命の歌人のものはなく、ぎりぎり戦後といったところまでの歌を掲載している。これは、高校における現代文分野が「近代以降の」とあることと併せて考えた場合、平成期にも活躍している歌人の作品については高校で扱うもの、と区分けしているのかもし

れない。次に、同一歌人の作品を複数あげているところである。ただし、それは「ふるさとの歌」ならば石川、「恋の歌」ならば与謝野、といったように、同一分類の中にあげられている。すなわち、この歌はこの分類、ではなく、この歌人はこの分類、といった観点であろうか。歌人への比重が高いということでもあり、文学史的観点の指導へとつなげることもできる載せ方ともいえよう。

光村図書
『国語2』
「季節のしおり春」
三好達治
春の岬旅のをはりの鴎どり浮きつつ遠くなりにけるかも

3言葉と向き合う
表現を味わい、言葉の世界を広げる

「新しい短歌のために」馬場あき子
目標
・筆者のものの見方や表現のしかたなどを読み味わい、短歌の世界に親しむ。
正岡子規
くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる
与謝野晶子
なにとなく君に待たるるこころして出でし花野の夕月夜かな
斎藤茂吉
ただひとつ惜しみて置きし白桃のゆたけきを吾は食ひをはりけり
寺山修司
海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり
俳万智
思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のくこみ

学習
目標
・筆者のものの見方や表現のしかたなどを読み味わい、短歌の世界に親しむ。
1　確認しよう
歌われている情景を想像しながら、短歌を声に出して読もう。
2　読みを深めよう
本文を読み、短歌についてまとめよう。
1　どのような形式の詩で、いつ頃から歌い継がれてきたものか。
2　本文中から、筆者のものの見方や感じ方がよく表れている

表現を抜き出して、意味を考えてみよう。

短歌を創作しよう

短歌にしたい題材を考え、次の観点を参考に短歌を作ってみよう。

・見たり感じたりした情景をそのまま表現する。
・心に残る出来事や感動したことなど、自分の思いを表現する。

「短歌を味わう」

・歌われている情景や作者の思いを想像しながら読み、内容や表現のしかたについて感じたことを話し合ってみよう。

窪田空穂
麦のくき口にふくみて吹きをればふと鳴りいでし心うれしさ

若山牧水
白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

石川啄木
不来方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心

馬場あき子
つばくらめ空飛びわれは水泳ぐ一つ夕焼けの色に染りて

栗木京子
観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生

穂村弘
校庭の地ならし用のローラーに座れば世界中が夕焼け

「季節のしおり夏」

与謝野晶子
夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり

「季節のしおり秋」

長塚節
馬追虫の髭のそよろに来る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし

「季節のしおり冬」

木下利玄
街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る

光村図書は、「3言葉と向き合う」という大きな章の他に、「季節のしおり」という言語事項のページに四季それぞれが表された短歌を掲載している。

大きな章の中には、馬場あき子による書き下ろしの「新しい短歌のために」という鑑賞文による章が載せられている。そこでは、五首の評があり、その後に解釈→創作へと活動を提起する章末課題がある。次の章として、「短歌を味わう」として六首が載り、「創造しな

がら読み」「話し合ってみよう」とされる。すなわち、解釈の章である。

歌人としては、三好・窪田・長塚は光村図書のみが掲載している。また、斎藤「ただひとつ～」・俵「思い出の～」・馬場「つばくらめ～」・穂村「校庭の～」・与謝野「夏のかぜ～」の各歌も光村図書のみの掲載である。

以上のことから、光村図書は短歌の解釈に重点があると考える。特に、構成をみると、2つの章から成り立つが、前者は解釈→創作、後者は解釈となっている。この2つを連続で実施する場合、解釈→創作→解釈となる。すなわち、二度目の解釈の深まりに向けて、一度目の解釈と創作がある。ただし、その解釈や創作の方法については、さほど詳細には載せられていない。また、後者では、短歌が掲載されるほかには「歌われている情景や作者の思いを想像しながら読み、内容や表現の仕方について感じたことを話し合ってみよう。」とのみある。短歌に触れるという意味では、確かにこれで十分かもしれない。ただし、中学生という学習者にとってはどうだろうか。その手立てや視点などのいくつかのポイントの提示が必要なのではないだろうか。

4　小括

調査および考察の内容をまとめ、意見を述べる。

さて、五社の教科書における短歌は、どのような資質・能力を育むことを企図した学習材として配置されているか。五社ともに共通するのは、解釈、すなわち、「読む力」を育もうとしたり、「読むこと」を企図する活動が提起されていることである。創作、すなわち、「書く力」の育成や「書くこと」については三社となっている。短歌を素材としての他の文章への書き換え、すなわち、「読む力と書く力の融合」を提示しているのは二社である。また、例えば四季と関連させた言語文化として扱っているのが二社である。なお、活動として音読を全社が取り入れている。

これらのことから、短歌は「読む」学習材というのが基本的姿勢として考えられていると思われる。短歌における語用や省略などを踏まえての解釈により、語への注目や作者の心情把握などに留意することを指導するためのものとして考えられているのだろう。あるいは、小学校ないし高校での短歌に関する単元において創作を担ってもらうという校種段階の別を考慮しているのだろうか。これについては、稿を別とし、考察を深める。

創作については、三省堂が短歌作成ではなく、短歌を素とした書き換えを取り入れていることが興味深い。ここからも、短歌が、作歌よりも解釈素材としてより注目されていることがとらえられる。また、創作の手順自体を細かく提示しているのも二社のみである。

音読については、韻文である短歌という側面がクローズアップされているものと考える。ただし、ではどのような読み方をするのがこの短歌に相応しいか、などを考えさせた場合、これもやはり、解釈を

必要とするものとなるものである。これらのことから、中学校国語教科書における短歌掲載は、創作・作歌の面が強くはなく、解釈を中心とした構成であることがいえるだろう。

ところで、注目したいものとして、教育出版における「短歌の鑑賞文」作成の学習活動がある。鑑賞行為そのものはやはり解釈が必要とされるものであり、各社においても、鑑賞という言葉の有無は別として、この行為そのものを促している。本稿では、短歌に関する単元デザインの際、この鑑賞行為を延長・発展させ、鑑賞文の作成へとつなげるデザイン単元を提案したい。五社のうち三社が、それぞれ道浦・俵・馬場による書き下ろしの鑑賞文を掲載していることはこの単元に大きく有効であろう。この書き下ろしを例文として鑑賞文作成へと向かわせたいのである。つまり、書き下ろし例文とそこで鑑賞されている短歌に向き合わせることにより、この短歌のどこに注目すればよいのか、鑑賞文にはどんなことを書けばよいのか、などを具体的に学ばせることができる。そしてそこから、短歌を鑑賞・解釈するにはどういったところに目を配ればよいのか、といった短歌解釈へのメタ認知がなされるよう学習させる単元としたいのである。この短歌はこういったものだ、と知るだけでなく、どの短歌にも様々に着目できるようにしたい。つまり、文学的な文章を読むことの資質・能力育成へとより強く企図するものとしての鑑賞文作成単元の提案である。

掲載短歌については、明らかな偏りが見られる。掲載されている短歌数は、十二首～二三首と幅があるが、このことについては、数の多少による妥当ははっきりとは言えない。ただし、掲載短歌の作成時期は近代に大きく偏っているといえる。端的なのが教育出版であり、章の名称自体が「近代の短歌」であった。ここには大きく疑問を感じる。特に、短歌を解釈するならば、その時代背景等が必要であろう。与謝野「その子二十～」が当時の女性観なくしてその際立たしさがとらえ切れないようにということである。よしんば、現代にも通ずる普遍性や共通性が感じられるものであったとしても、それはあくまでも対比物、現代文との相対的位置を考えるべきもの、それを指導するためのものではあるまいか。割合の感覚でいえば、逆転してもおかしくはないものとも考える。

また、区分があるものがある。「恋の歌」「心と自然」などであるが、おそらく、解釈の手がかりとしてのものであろう。ただし、これらの区分けは、提示するのではなく、区分けそのものを学習者に考えさせたい。例えば、以下の歌を「恋の歌」「ふるさとの歌」に区分けするとすればどれとどれになるか、例えば、この歌とこの歌の共通性はどんなものだろう、例えば、これらの歌を区分けするとすれば、どのように区分けするか、また、その区分けごとにテーマ名を決めよう、といったものである。つまり、解釈したものをもとに、比較するのである。解釈をその歌単独のものにするのではなく、相違や共通を考えさせ、連関させるのである。

句切れに着目させるものもあるが、それ以上に、留意したいのが

字余りであろう。それは短歌が定型だからこそ考えさせたいものがあるからだ。語彙である。栗木「観覧車～」における下の句は「君には一日我には一生」であるが、これはどう読むのか。「きみにはいちにち」であったならばそれは字余りであるということを手がかりに考えさせたい。結句を「われにはひとよ」と読めるだろうか。字余りや四句や漢字や語意を考えさせたいのである。それは解釈を活かした読みであり、そこから気づき始める表現や言葉の豊かさと可能性である。この考えを基にした場合、中学校では字余りの短歌を掲載するのはどうであろうか。五七五七七という定型を考えさせ、だからこその語用、だからこその表現、というものを追求させたい。そして、それを受けての高校での短歌単元という系統性を主張したい。

本稿では、平成27年度中学校教科書における掲載短歌について調査および考察した。以降、同時期の小学校・高校教科書についても順次実施し、それらを統括した論考をしていく。

〈注〉

注1　入江昌明(二〇一〇)「平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(1)」『教育諸学研究』24　神戸女子大学、入江昌明(二〇一一)「平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(2)」『教育諸学研究』25　神戸女子大学、入江昌明(二〇一三)「平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(3)」『教育諸学研究』26　神戸女子大学

(おおむらときお／札幌国際大学)

参考資料

		東書			学図			三省			教出			光村			
		①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	
岡本かの子	桜ばな～～		○														1社1冊
北原白秋	草わかば～～		○						○								2社2冊
	帰らなむ～～											○					1社1冊
	この山は～～											○					1社1冊
荻原裕幸	夏木立～～		○														1社1冊
早坂類	虹よ立て～～		○														1社1冊
穂村弘	ほんとうに～～		○														1社1冊
	シャボンまみれの～～								○								1社1冊
	校庭の～～														○		1社1冊
千葉聡	卒業生～～		○														1社1冊
与謝野晶子	金色の～～		○														1社1冊
	その子二十～～								○								1社1冊
	なにとなく～～											○			○		2社2冊
	小百合さく～～											○					1社1冊
	夏のかぜ～～														○		1社1冊
寺山修司	海を知らぬ～～		○												○		2社2冊
	わがシャツを～～					○											1社1冊
	列車にて～～								○								1社1冊
栗木京子	観覧車よ～～		○			○			○						○		4社4冊
正岡子規	くれなゐの～～		○			○			○						○		4社4冊
斎藤茂吉	最上川～～		○														1社1冊
	死に近き～～					○						○					2社2冊
	みちのくの～～					○			○			○					3社3冊
	朝さむみ～～					○											1社1冊
	寄り添へる～～					○											1社1冊
	我が母よ～～					○											1社1冊
	のど赤き～～					○						○					2社2冊
	星のゐる～～					○											1社1冊
	ただひとつ～～														○		1社1冊
若山牧水	白鳥は～～		○									○			○		3社3冊
石川啄木	不来方の～～		○			○			○						○		4社4冊
	やはらかに～～											○					1社1冊
	ふるさとの～～											○					1社1冊

図１－１　平成 27 中学校国語教科書掲載短歌一覧

		東書			学図			三省			教出			光村			
		①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	
俵万智	「寒いね」と～～		○						○								2社2冊
	思い出の～～														○		1社1冊
作者不明	お互いに～～		○														1社1冊
	そして今～～		○														1社1冊
	「ごめんね」と～～		○														1社1冊
	雪積もる～～		○														1社1冊
	踊り場で～～		○														1社1冊
	弟が～～		○														1社1冊
	押し入れは～～		○														1社1冊
	宿題を～～		○														1社1冊
	図書室は～～		○														1社1冊
道浦母都子	秋草の～～					○											1社1冊
河野裕子	振りむけば～～					○											1社1冊
馬場あき子	あやまたず～～					○											1社1冊
	つばくらめ～～														○		1社1冊
平井弘	困らせる～～					○											1社1冊
釈迢空	たゝかひに～～					○											1社1冊
	葛の花～～								○								1社1冊
土岐善麿	遺棄死体～～					○											1社1冊
岡野弘彦	砂あらし～～					○											1社1冊
岡井隆	眠られぬ～～					○											1社1冊
植田多喜子	顔よせて～～					○											1社1冊
佐佐木幸綱	のぼり坂～～					○											1社1冊
永田紅	細胞の～～								○								1社1冊
吉井勇	夏は来ぬ～～											○					1社1冊
木下利玄	街をゆき～～											○			○		2社2冊
佐佐木信綱	ゆく秋の～～											○					1社1冊
三好達治	春の岬～～														○		1社1冊
窪田空穂	麦のくき～～														○		1社1冊
長塚節	馬追虫の～～														○		1社1冊

図１－２　平成 27 中学校国語教科書掲載短歌一覧